

幼虫時代をアリと過ごす蝶

アリというのは、昆虫達にとってとても怖い集団ですが、このアリと共存あるいは寄生している蝶がいます。アリを敵に回せば大変なことになりますが、味方につけるわけですからこれ以上安全なことはありません。シジミチョウの仲間ではブナ科の植物を食べているミドリシジミ類の幼虫にはアリは興味を示しませんが、草原に棲むシジミチョウの仲間の大部分の幼虫はアリとの接触があり、特に以下に示す、4種類の蝶のみがアリの巣で幼虫時代を過ごすことが知られています。

これらの幼虫は背中にある蜜線という分泌器官から甘い蜜を出すので、アリはこれを巣まで運び込みます。そのおかげで、幼虫は寒い冬を温かいアリの巣で過ごすことが出来ます。

まず、キマダラルリツバメはシリアゲアリとの共存が知られています。クロシジミはクロオオアリとの共存です。これらの蝶の幼虫は甘い汁をアリに与え、アリは蝶の幼虫に口移しで餌を与えます。この2種は共存タイプとっていいでしょう。

ところが、ゴマシジミとオオゴマシジミはちょっと違った方法で共存というよりも寄生といったほうがよい生活をしています。ゴマシジミはクシケアリの巣へ、またオオゴマシジミもクシケアリの巣へと運ばれます。幼虫がアリに甘い汁を与え、アリは幼虫に餌を口移しに与える様子は前記2種と同じなのですが、その他にこの2種はアリの幼虫や蛹を食べています。この様子は、NHKの「生き物地球紀行」でも見事に映し出されていましたが、アリはそのことを気にする様子もなく、また攻撃するでもない様子に驚きました。共生というよりもゴマシジミやオオゴマシジミによるアリの一方的利用で、共存ではなく寄生といった方が良いでしょう。

ただ、これらの蝶も羽化して蝶になった時に、一刻も早くアリの巣から逃げ出さないとあっという間に餌食になります。というのも、成虫になるともう甘い汁を出さないからです。また、ちょっとでもアリの巣からの脱出に時間が掛かると柔らかい翅が固まってしまい命を落とす成虫も多いようです。



キマダラルリツバメ



クロシジミ



ゴマシジミ



オオゴマシジミ

同じ起源をもつアリとハチは、高度に発達した社会を作っており、多数の成虫と幼虫とからなる群れにいるため、手っ取り早い餌として狙ってくる敵が数知れません。そこ

で

- ①その防御として、強力な毒針で武装したのがハチ
- ②邪魔な翅を捨てて、襲われにくい地中に潜ったのがアリ

だったというわけです。原始的なアリの種類になると、ハチと同じように毒針を持っています。体長2cmを超えるオーストラリア産のブルアントは、強力な牙と毒針を持つ原始的なタイプのアリで、これに刺されるとアシナガバチに匹敵するほどの痛みで襲われるそうです。
